

## 朝鮮、餓死寸前より

京都府 内藤 徳治郎

昭和十一年、当時朝鮮では、農業教育の普及に力をいれていた。私は学校推薦で、朝鮮大邱師範学校に、希望と不安をもって入学することができた。当時は平穩で、学業に専念することができた。学校卒業後、短現として入隊、その後半から事變の拡大を知る。

昭和十二年九月初めて、教壇に立ち、教員としての第一歩を踏み出した。学校では教練の授業が取り入れられ、戦争色は次第に強くなっていった。昭和十七年、結婚し、翌年長男が誕生した。

この頃は、まだ平穩であったが、米や砂糖が配給制になり、量も極めて少なかった。児童とともに防空壕を掘ったのもこの頃だった。

私は青年学校の指導員を兼務していたので、午後と日曜は、教練の指導で休む暇もなかった。

生活は苦しくなり、新聞も小型になった。

昭和二十年七月、知足小学校長を拝命したが、学校に赴任することもできず、不安な状況の中で、家族をまもることが専一だった。昭和二十年八月、終戦を警察官駐在所で聞き、感無量だった。昌善島での日本人は、六人たらずだったが、流言の中での生活は、筆舌を越えた苦痛の生活だった。

妻や子ども達は、地元の人達の好意で、朝鮮服を着て、かくれたりしたのもこの頃である。

早く帰国しなくてはという意思ははたらいても、行動がともなわず、流言にまどわされ、外に出ることも危険であるように思われ、戦々恐々の日々で、生き地獄さながらだった。

日本人が郡の中心地に集結しているという噂を聞き、昌善島脱出を計画。家財道具はそのままにして、私は長男、妻は長女をせ負い、手には、オムツをいれた風呂敷包みや、鞆をさげて出発した。地元の人達や、教え子が荷物を持ってくれたりして、遠路四キロを見送って別れをおしんでいただいたことは感謝にたえない。今もその

ときの状況が脳裏をよぎる。家財の中には、妻の衣類が多く、妻に気の毒で断腸の思いだった。いつも冷たい眼を背に受けてはいたが、直接行動はなく、ぶじ日本人の集結地に着くことができ、再会を喜びあった。

男達の脱出の結論は、帆船で釜山まで行くことであつた。さいわいにして帆船が取得でき、官憲の調べもすみ、船出できた。この気持は、言葉にたとえようもない。昼は陸地にあがり、夜だけの逃避行、海水でご飯を炊き、小川の水をのみ、一週間後釜山に上陸することができた。まさに餓死寸前だった。長女は、母乳も出ず栄養不良でやせ細っていた。なんとかこの生命をと祈るのみだった。

釜山では、さいわいにして、日本軍の規律が存在していて、私共は生きる希望をもった。釜山第六小学校に収容され、一週間程度すごした。このとき、その校長先生の好意により、履歴書を書き、道庁の証明印まで取得することができたことは、不幸中のさいわいというほかはない。これが帰国後、復職に役立ったことというまではない。軍から避難民の証明をいただき、連絡船に乗船

し、山口県仙崎港に上陸したのは、昭和二十年九月三日早朝だった。

やっと内地に帰れたという喜びと、これからどうするか不安と、これが実感だった。

## 五人の子を一人で連れて

兵庫県 中原 治子

ソ連が満州に侵入したので、満州から着のみ着のまま引揚げてくる人で、釜山は騒然としていました。ところが、八月十五日終戦の詔勅が下り、満感胸に迫り、涙涙でした。主人は二月に三度日の応召で奉天にいましたが、三十八度線の閉鎖で釜山には帰ってこられなくなり、消息も絶えてしまいました。釜山の朝鮮人も立場が逆転し、不安は増すばかりです。

応召前は、釜山で小児科医院を開業していましたが、主人が帰ってきたら開業ができるかもしれないと思いい、家財道具、医療器具はそのままにして、とにかく着